

友人

sanukisoba

会社に向かう電車の中で目の前のおじさんの読んでいる新聞をそれとなく覗き読みしている時、携帯が震えた。首都高で横転したワゴン車は違法改造を行われていた疑いがあるというあたりまで読んだところだったので、その記事を全部読んでから携帯を確かめても良かったのだけど、その時はなんとなく気になって携帯をカバンから取り出した。取り出すときに肘が後ろの人に軽く当たってしまい消え入るような声で「すみません」と頷くように頭を揺らす。

携帯の振動はメールの到着を告げる振動で、メールの送信者は職場の先輩だった。私より30年くらい前に入社をしている大ベテランの彼女と、部署が一度も同じところになったことがないのに仲良くしているのはタバコがきっかけ。入社して半年くらい経った頃、喫煙所で彼女と一緒に言葉交わしたのが一番最初の接点だと記憶している。その後もしばしば喫煙所で一緒になり、お昼を一緒に食べに行くようになり、お酒を飲みに行く機会もでき、休みの日に遊びに行くようになった。

彼女は会社でも有名なデキる社員で、彼女に逆らえるような人はうちの職場にはいない。何故そんな人が私と仲良くなり、しかも私を高く評価しているのかはよくわからないけれど、少なくとも彼女と私は仲が良く、彼女の息子に会ったこともあるし、彼女の旦那さんと彼女と私の3人で朝まで飲み明かしたこともある。会話の内容も高校や大学の友人と話すようなそれと大差ないしお互い「バカじゃないの」なんて腹を抱えて互いを笑うこともあるけれど、それでも私にとっては大ベテランの先輩で、友達といえれば言えなくもないが、結局のところ私は彼女に敬語を今でも使うし、その微妙な距離感は知り合って3年くらい経つ今でも解決しきれしていない問題だ。とはいえ私も最近態度がだいぶフランクになっているのは自覚しているが。

メールを開き、私はちょっと動揺する。入院が決まったので暫く休むとのこと。確かに以前から体調を崩し気味で何度か検査のために会社を休んでいるのは知っていたが、それにしてもこんなに急に入院だなんて、突然すぎて驚く。その驚きを隠せない返事を私は彼女に送信する。おはようございます。びっくりしました。大丈夫なんですか。詳しいお話は落ち着いてからでいいですがお見舞いには行きますので入院先とか教えてくださいね。彼女からの返事はすぐに来たけれど、生憎電車は目的地に到着し、私はそのメールを確かめることがないまま出社する。

彼女とその後何度かメールのやり取りをして聞き取った内容では、今回の入院はあくまで検査入院だけど、その結果次第によってはそのまま入院に突入してしまうし、その場合手術の可能性もあるとのこと。もちろん、何事もなければ投薬治療となって退院するらしいのだが、いざいざにしても1週間以上の入院は確定しているらしい。

入院は来週の月曜から。入院の準備等で忙しいから申し訳ないが入院の前に会うことは難しいと言われ、どうせ自分は病室で暇を持って余しているんだろうからお見舞いに来てくれると嬉しいが、わざわざそのために仕事を休む必要はない。どうせ休むなら結婚相手を探すために使えというありがたい助言を私は受け取る。

とても心配ではあるけれど、大概の大人がそうであるように自分は自分の生活を守ることに忙しく、私はその後結局来週の土曜日に行くという連絡をしてその後特に彼女と連絡を取らなかった。彼女からの連絡がなかったというのも理由の一つではあるし、なんだかんだ入院も忙しいのだろうと私は言い訳をする。メールをもらってからお見舞いに行くまでの2週間、その言い訳は私の中で持続した。

約束したお見舞いの日を迎え、私は病院に向う途中お見舞いの品を物色する。一昨日になって彼女からメールが届き、入院が結局1週間伸びたので忙しければ無理して明日来ることはないという内容だった。忙しくはないので伺いますが心配ですね、という返事を書いた時私はお見舞いの品は本にすることを決めていた。彼女と共通している趣味の一つはタバコで、もう一つは読書。私はブルーバックスの新刊と私が好きな作家の探偵小説、川端康成の短編集とウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』を選び、店を出る。論理哲学論考であれば入院中に読み終えて飽きることはないだろうという粋な計らいを彼女ならわかるだろうという確信とともに。

病院の受付で面会の手続きを済ませる。患者の生年月日や住所を面会票に書き込まなければならず、住所なんて記憶していない私がどうしようかと頭を抱えていると受付の女性が「どうしても分からなければ適当でいいですよ。東京西部、とかそれくらいでも」と言うので言葉に甘えて中央線沿線と記入し、入院患者様との関係という部分には「知人」と書いて提出し、引き換えに面会カードを首からぶら下げてもらった。

14階のA棟4号室に滞在している彼女は少なくとも見た目はいつもと同じで、口の悪さも頭の回転もいつも通りだった。「私もとうとう高層階の住人になったわよ」という彼女に「バカなこと言ってないでさっさと下界におりますよ。これお土産です」と本を渡すタイトルを一通り確認しなかなかいいチョイスだね、特にウィトゲンシュタインが、というお言葉をいただき恐縮する。彼女は元気だけはあるとメールでも言っていたが実際その通りで、結局彼女は私を面談ルームに連れ込み3時間ほど私と雑談を楽しみ、「面会時刻はそろそろ終了です」と看護師から言われた私はおとなしく病院を後にした。

「また来てね」
「さっさと退院してくださいよ。少年院に入れなかったからって病院に入院されるくらいなら大学院にでも入院してくれた方がマシです」
「うちの息子もあんたくらいのクチが聞ければもう少しモチたんだらうけどね、残念」

結局、彼女との会話はそれが最後になった。
心臓に重篤な疾患を抱えていた彼女は、私と会った後も退院をすることはなく、入院から1ヶ月を迎える頃、あっけなく亡くなった。

彼女の葬式に参列し、遺影をぼんやり眺めていても私は「もっとお見舞いに行けばよかった」「もっとメールをすればよかった」とか、そういうことは不思議と一切感じなかった。悲しいのは事実だし、あんなに仲のよかった人が世界から消えてしまったのはとても悔しいし、生き死にの前に自分はなんて無力なんだろうと思うのも事実だけど、それでも私の胸には「もっと何かをしてあげば」という後悔や反省ではなかった。ただ、漠然と何か後悔のような、心残りのような感情がずっと渦巻いていた。

葬儀を後にするとき、彼女の旦那さんと話をした。少し疲れた雰囲気を見て、心配にもなったけれど、それは私にはどうすることもできないことで、つまるところ私は旦那さんに落ち着いたらまたお会いしましょうと告げ、私と数歳しか変わらない彼女の息子にも「そのうちまた会おう」という約束をした。

私が抱えていた心残りのような感情がなんだったのかわかったのは、葬儀場の最寄駅の改札をくぐった時だった。私は彼女を見舞った時、面会の申し込みに彼女との関係を「知人」と記載した。なんで私はあの時「友人」と書かなかったのだろう。友達としか言いようのない関係を築いていたというのに。

その時初めて私は友人を失った悲しみの大きさに気づき、ホームの端で涙をぬぐった。彼女に対し申し訳ないという感情が軽く胸を締め付けた。